

8-9 世紀のイニシアル研究 ——カロリング朝写本画の様式解釈についての一考察——

安藤さやか

はじめに

1990年代よりEUの発足と連動するように、ヨーロッパの統合者としてのシャルルマーニュ或いはカロリング朝に関する展覧会が各地で開催され、欧州各地では近年、展覧会及びそれに随伴するシンポジウムや論文集を中心として、カロリング朝芸術再考への関心が高まっている¹。またドイツ国内では、カロリング朝期の建築物の相次ぐ世界遺産登録と登録申請に伴い、この時代を歴史的にも文化的にも広く周知しようとする旨の展覧会が各地で開催されている²。加えて、膨大な資料を所蔵する公立の機関によって写本画のデジタルアーカイブ化が進められ、従来はファクシミリが刊行されているものを除き全図版の参照が困難であった彩飾写本も、その全体像を把握するのが容易になった。こうした技術的発展を受け、主として画像と言葉の比較や不可視のものゝ視覚化を中心とした、カロリング朝期の写本画のより詳細な研究が進められている。

カロリング朝芸術といえば古代復興を中心とした刷新運動という面が第一に挙げられる一方で、古代末期や東方に典拠を持つ図像を取り入れながら、写本テキストの内容をイニシアル装飾によって視覚化する、所謂バルバロイによって発明された図像イニシアルという形式が普及したのも、まさに8-9世紀という時代であった³。イニシアルによる装飾と図像の共存という、カロリング朝芸術に於ける非古代的な写本画の一分野は、とりわけこの言葉と画像との関連という観点からの研究が充実する一方、その成果は未だ形体論に還元されてはいない。本稿ではこの時代の芸術の非古代的な一要素としてイニシアル芸術の代表的写本3点を取り上げる。すなわち、海峡に近い修道院の写字室で制作された前時代の様式を色濃く残す1)《コルビー詩篇》と、初期の宮廷派豪華写本である2)《ハーレー福音書》、古代的な様式を踏襲した3)《ドロゴ典礼書》である。研究史に於いてはカロリング朝芸術の様式上の多様性と断絶という文脈の中に於かれてきた、互いに成立環境の異なる3点が、イニシアル装飾という形式で物語場面をいかに絵画化しているかを比較することを通じて、カロリング朝写本画の再考を試みたい。

1. 《コルビー詩篇》(アミアン、市立図書館, Ms. 18)

現在アミアンに所蔵されている《コルビー詩篇》と呼ばれる詩篇写本は、800-810年頃にコルビーの地の修道院の写字室で制作された、カロリング朝期のイニシアル装飾写本のうち古代復興からは最も遠いものである。詩篇やカンティクムの各篇の冒頭は鉄線描で描かれたイニシアルから始まり、欠損部分を除いて計156点のイニシアルが現存している。このうち人物像による図像表現を示すイニシアルは62点を数え、詩篇著者とされるダヴィデに関連した旧約聖書からの場面(figs. 1, 2)のみならず新約場面も含まれるが、必ずしもその主題は後続のテキストの内容を視覚化したものとは限らず、また主題の特定不可能な図像を持つものも多い⁴。動物や植物モチーフ、幾何学模様からのみ構成されるイニシアルも数多く、幾何学的な組紐文がインスラー芸術に由来する他、動物文はメロヴィング朝写本の鳥魚文イニシアルの系譜を引いており、先行する時代の写本芸術の残存という性格を色濃く示している。しかし魚の鱗や鳥、四足獣の足などがより細部まで書き込まれ写実性が高められていることが観察され、図像イニシアルを含めて同時代に類例を



fig. 1 《コルビー詩篇》詩篇第7篇イニシアルD「ライオンと闘う
ダヴィデ」800-810年頃 コルビー アミアン、市立図書館、
Ms. 18, fol. 6r

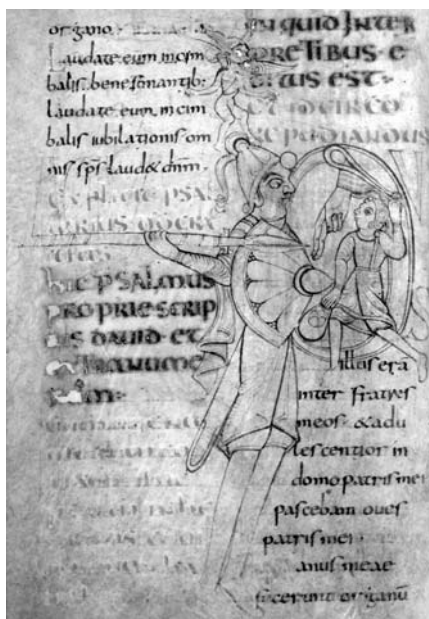


fig. 2 《コルビー詩篇》詩篇第151篇イニシアルP「ダヴィデと
ゴリアテの戦い」800-810年頃 コルビー アミアン、市
立図書館、Ms. 18, fol. 123v



fig. 3 《ヴェスパシアン詩篇》詩篇第52篇イニシアルD「ライオン
と闘うダヴィデ」8世紀第二四半期 カンタベリー ロンドン、
大英図書館、Ms. Cotton Vespasian A. 1., fol. 153r



fig. 4 《ハーレー福音書》ルカ福音書冒頭のイニシアル Q「ザカリアへのお告げ」800年頃 アーヘン、アダ派 ロンドン、大英図書館、Ms. Harley 2788, fol. 109r



fig. 5 《ハーレー福音書》ルカ福音書冒頭「福音書記者ルカの肖像／ザカリアへのお告げ」800年頃 アーヘン、アダ派 ロンドン、大英図書館、Ms. Harley 2788, fol. 108v-109r



fig. 6 福音書写本断片「ザカリアへのお告げ」800年頃(?)アーヘン、アダ派(?)ロンドン、大英図書館、Ms. Cotton Claudius B. V., fol. 123v



fig. 7 《ドロゴ典礼書》イニシアル C「キリスト昇天」845-855年頃 メッツ、メッツ派 パリ、フランス国立図書館、Ms. Lat. 9428, fol. 71v



fig. 8 《ドロゴ典礼書》イニシアル D「マギの礼拝」845-855年頃 メッツ、メッツ派 パリ、フランス国立図書館、Ms. Lat. 9428, fol. 34v

見ない装飾語彙の豊富さを見せている。

同写本はファクシミリが刊行されておらず包括的なモノグラフは限られているものの、しばしば通史やカロリング朝絵画の概論等に於いて、何点かのイニシアルが取り上げられている。近年では詩篇章句と図像との照合という観点からの研究が多いが⁵、様式についての見解は概ね以下の二つに大別できるだろう。即ち、O. ペイトやJ. ポルシェらによって代表される、ロマネスクを予告する遅咲きのプレ・カロリング芸術という解釈と、本作品のモノグラフ研究の著者であるU. クーダーによる、様式の多様性の証左としてのカロリング朝芸術という見解の二つである。

ペイトは1963年の論文「初期ロマネスク芸術におけるカロリング朝以前の淵源」⁶に於いて《コルビー詩篇》のイニシアル装飾を初期中世芸術理解の為の鍵となる作品として取り上げている。同論文は中世芸術を古典古代の残存と復興という点から評価する研究動向に疑問を提示し、バルバロイ芸術の遺産に焦点を当てることで初期ロマネスク芸術を理解しようと試みたものであり、バルバロイ芸術の影響を色濃く反映し、かつロマネスク芸術を先取りした、プレ・カロリング芸術の傑作として本作品を位置づけている。

《コルビー詩篇》の芸術性は二重の意味で時代錯誤である。インスラーと大陸の双方のバルバロイの伝統に染まっているので、同時代であるシャルルマーニュ支配下の宮廷芸術の基準から判断するとアルカイックである。他方、それは時代を遙かに先取りし、来たるべき遠い未来の青写真を含んでいる⁷。[…]

これまで挙げたプレ・カロリング芸術とロマネスク芸術の接触点を認めたとして、未だ議論されるべきは、バルバロイの伝統の影響が装飾の分野、即ちロマネスク芸術がオリエントの装飾的芸術の面影、つまり再びアンチ・クラシックの要素を帯びた分野だけに制限されたかということである⁸。

ここでペイトは、本作品のイニシアルを古代復興的な宮廷芸術と同時代でありながら、「プレ・カロリング」として区別している。即ち、1963年のペイトに於いては「カロリング朝芸術」は主として古代芸術に着想を得た宮廷のカロリング・ルネサンスを意味し、同時代芸術でありながら《コルビー詩篇》は前時代の芸術の遺産として位置づけられているのである。

こうした解釈は、中世写本画研究の大家であり本作品を論文及び通史で取り上げたポルシェに於いてもほぼ同様である。ポルシェはカール大帝の宮廷派による最初の写本《ゴデスカルク福音書抄本》(パリ、国立図書館、Ms. Nouv. acq. Lat. 1203)と《コルビー詩篇》に主にその人物像の容貌比較から様式的類似を見だし、《ゴデスカルク福音書抄本》を、以下で取り上げるアグ派写本に代表されるその後の宮廷派写本から切り離しバルバロイ的とすることで、《コルビー詩篇》のイニシアル芸術もまたバルバロイの遺産として位置づけているのである⁹。

〔《コルビー詩篇》のイニシアルは〕 古代的な物語的方法、自然主義的イリュージョンとは正反対のものである。古代へと振り向いたカロリング朝の人々はそれを無視し、ロマネスク美術はそれを想起するだろう¹⁰。

ポルシェにおいてもまたペイトと同様に、本作品は制作年代からは既にカロリング朝に属しながら、バルバ

ロイのという点で他のカロリング朝芸術とは別個の、言わば例外として考えられていることが伺える。

こうしたカロリング朝の様式解釈に対して異なった見解を示したのが U. クーダーである。クーダーが《コルビー詩篇》のモノグラフにおいて行ったのは主にイコングラフイーの詳細な研究であったが、その最終章にてこの異色のイニシアル芸術の難解な様式的位置づけを試みている¹¹。彼はまず制作年代からしてカロリング朝に属する本作品を、アダ派写本や他の宮廷派写本と同様、カロリング朝写本として扱う。そして、人物像という具象的モチーフとイニシアルという幾何学形体を統合させることがそもそも非古代的な手法であるとして、この時代の芸術が決して古代復興運動の一枚岩によるものではなかったことの証左としているのである。

アミアン詩篇のイニシアルは異質なもの同士を統合しており、その点でとりわけ典型的にカロリング朝的である¹²。[…]

形象イニシアルは装飾イニシアルと同様、まずそれ自体が非古代的である。もしカロリング朝芸術を一面的に古典古代の存続と復活として、すなわちレノウアティオとして特徴付けるのであれば、アミアン詩篇はそもそもカロリング朝芸術には属さない。

逆に、形象イニシアルは、カロリング朝芸術をもつばら中世の古代化の潮流として理解しようとする試みがある特殊性を見誤ることの証拠である¹³。

カロリング朝の写本画を古代復興という点からのみ解釈することへの異論として《コルビー詩篇》のイニシアルを挙げているという点ではペヒトと同様であるが、クーダーはここで宮廷派写本と本作品とをカロリングとプレ・カロリングという言葉で区別しない¹⁴。カロリング朝芸術の一つの特徴として異質なもの同士の統合という点を挙げることで、寧ろ積極的に本作品をカロリング朝芸術の中に位置づけているのである。この点に、イニシアル装飾の様式解釈を通じたカロリング朝芸術観の一つの転換が起きていると言えるだろう。では《コルビー詩篇》のイニシアルと、他のカロリング朝のイニシアルの間ではイニシアルによる物語場面の表現に於いてどのような差異が見られるのか、具体的にそれぞれの特質が比較される必要があるだろう。

《コルビー詩篇》のイニシアルの図像表現の形式は、二つの系譜、すなわちインスラー写本と、メロヴィング朝写本に起源を求めることができる。前者に由来するのは、「物語イニシアル¹⁵」と呼ばれる、文字の開口部に説話場面を表す形式であり、8世紀前半にイングランドで発明されたものであった¹⁶。カンタベリーで8世紀第二四半期頃に制作された詩篇写本《ヴェスパシアン詩篇》¹⁷の「ライオンと戦うダヴィデ」のイニシアル (fig. 3) には、D という丸い形状の文字の開口部にライオンと素手で闘い羊らを解放するダヴィデ伝が表されている。カロリング朝期の《コルビー詩篇》では詩篇第7篇の「ライオンと戦うダヴィデ」のイニシアル (fig. 1) がこの形式をとる¹⁸。コルビーの画家はこのイギリス写本を直接参照したのではないが、リボンによって形成される文字の開口部に「ライオンと闘うダヴィデ」の場面が組みこまれており、《コルビー詩篇》の画家が同様のイングランドの写本を参照した可能性が考えられる。ただし《ヴェスパシアン詩篇》ではダヴィデが四分の三面観で表されており、開口部内に背景の地が多く残されているのに対して、《コルビー詩篇》では、ダヴィデもライオンも側面観で描かれ余白が少なくなり、文字の開口部のうち人物の閉める割合が格段に増えている。大きな人物像の膝や衣、四足獣の脚が随所で文字のリボンに内接し隙間を充填することで、文字内部の空間性を否定し平面化を押し進め、文字と一体化していることが観察できる。

一方、大陸のメロヴィング朝写本に由来するのが、形象イニシアルと呼ばれる、文字に人物像の形を当てはめ、モチーフそのもので文字を構成するイニシアルである。魚や鳥、四つ足動物を組み合わせて文字を構成する装飾文字がメロヴィング朝写本では盛んであったが¹⁹、そこにテキストの内容を喚起させる人物像を当てはめたのが8世紀末の《ジェロヌの典礼書》(パリ、国立図書館、Ms. Lat. 12048)と呼ばれる典礼書写本のイニシアルであった²⁰。《コルビー詩篇》では例えば詩篇第151篇の「ダヴィデとゴリアテの戦い」のイニシアルP (fig. 2) がそれにあたる²¹。ゴリアテの巨体がPという文字の軸をなし、それに立ち向かう小さな身体のダヴィデの投げる石の軌跡が、文字の円弧の部分構成している。文字そのものが持つ形状を巧みに利用したダヴィデ伝の一場面であり、単に象徴的に人物像を表すだけでなく、ダヴィデが生き生きと動くナラティブな説話場面の表現に成功している。

こうした文字の開口部を、文字の形状に合わせて人物像で充填する物語イニシアル、或いは人物像や動物モチーフそのものが文字の形を構成する形象イニシアルは、ロマネスク期になって隆盛を見るものであった。例えば12世紀初頭のシトー派写本のイニシアルでは、文字を人物やグリフォンそのものによって表し²²、また同様に12世紀初頭のイギリスの詩篇本《セント・オルバンス詩篇》(ヒルデスハイム、大聖堂宝物庫)のイニシアルでは、文字の開口部に、文字の形状に合わせて受胎告知場面が表されているが、人物像は文字の枠組み一杯を占める大きなプロポーションで表されている²³。無論ここには直接的な影響関係は存在しないが、《コルビー詩篇》のイニシアルが、前時代のモチーフを継承しながら、人物像を大きくとり図像と文字の同一化を押し進めた、ロマネスク写本のイニシアルと原理的に類似した様相を示していることが観察できるのである。

2. 《ハーレー福音書》(ロンドン、大英図書館、Ms. Harley 2788)

一方、カロリング朝の宮廷派写本のうち、イニシアルによる図像表現を持つものはアダ派と呼ばれる福音書写本群で初めて現れた。アーヘンでいずれも800年頃に制作された初期の宮廷派の3点の福音書写本では、四福音書の冒頭頁が全頁大のイニシアルによって装飾されている²⁴。ここでは3点の写本のうち最も説話的性格の強いイニシアルを備える1点、大英図書館の所蔵する《ハーレー福音書》を取り上げる。

《ハーレー福音書》は大型の福音書写本²⁵であり、対観表に続き四福音書の冒頭頁は、見開きで向かって左手側に福音書記者像が、右手に巨大イニシアルから始まる福音書の冒頭の言葉が対応させられている。福音書記者像もイニシアル頁も共に、金で縁取られた枠内を紅紫色の地で埋め、朱と紺に加え金を多用した重厚な彩色が施される。このうち、マタイ福音書のイニシアルL (fol. 14r) には図像表現が無く、マルコ福音書のイニシアルI (fol. 72r)、ヨハネ福音書のイニシアルI (fol. 162r) は、組紐模様による幾何学的な文字の節に付けられたメダイオンの中に福音書記者らの胸像を表しており、ルカ福音書の冒頭のイニシアルQ (fol. 109r) のみ、文字の形体を利用しその開口部に「ザカリアへのお告げ」(『ルカ福音書第1章5-22節』)の場面が表されている²⁶ (fig. 4)。インスラーの写本で発明された物語イニシアルは、ここでは全頁大の福音書記者像と物語イニシアルが見開きで対応する形で配置されている点が特徴的である (fig. 5)。

本写本はカロリング朝の物語イニシアルの最初期の作例としてのみならず、宮廷派の初期の代表的な作例として取り上げられる。例えばボルシェによるカロリング朝写本画の通史では、アダ派写本はその福音書記者像の座す空間表現を比較すれば明らかであるように、カール大帝の宮廷派の最も早い彩飾写本である《ゴデスカルク福音書抄本》とは一線を画すものであり、カロリング芸術における古代復興の幕開けを告げる作

例と位置づけられている²⁷。但しこうした様式理解の上で注意すべきは、福音書記者像のミニチュールとイニシアルが全く別個に扱われている点である。多くの場合、福音書記者像の頁は建築モチーフによる空間表現や人物像の衣紋による量感表現に焦点が合わせられ、一方で物語イニシアルはテキストとの関連性やイコノグラフィーの点から解釈される。こうした、研究史に於ける福音書記者像挿絵とイニシアルページとの分離した現象は、A. シャルトに始まるイニシアル装飾に関する研究が、数多くの写本を扱いながら専らイニシアルのみを切り出して取り上げていたことにも起因するだろう²⁸。しかし実際には建築枠を用いた三次元的空間の中に座る福音書記者像と、組紐模様で埋められた文字を枠組みとして内部にザカリアへのお告げを表す物語イニシアルは、一冊の福音書写本の中に見開きで同時に見られる形で併置されており²⁹、カロリング朝芸術における古代復興の典型的な例と、インスラーに由来する極めて非古代的な形式である物語イニシアルとが共存している点は留意しておく必要がある。

モニュメンタルな福音書記者像と同様に、同写本では全頁大ミニチュールとして、Q という文字の形体の開口部に、ザカリアへのお告げの場面が表されている。ローマ風の半円アーチとその下に記されたローマン・キャピタルによるインスクリプションは古代を想起させる一方で、半円アーチを反復する円形の、金色を用いた幾何学的な組紐模様の文字枠は、インスラー芸術に由来するものである。カール大帝が欧州各地より知識人を集めたアーヘンにおいて、ブリテン諸島の写本ないしはこうした装飾を得意とする写本画家がアーヘンへと齎された可能性も十分考えられる。しかしここでは、開口部に表された人物は文字に対して小さく四分の三面鏡をとっており、開口部に背景地の余白を残している。更に、同じアダ派によると考えられている福音書写本断片³⁰の「ザカリアへのお告げ」(fig. 6)と比較するならば、物語イニシアルによる説話表現に於ける写本画家の創意は明らかであろう。即ち、福音書写本断片の挿絵では四角く枠取られた中央に大天使ガブリエルとザカリアが表され、その左右にはザカリアを待つ群衆が配されているのに対し、《ハーレー福音書》の物語イニシアルでは、恐らく手本にはあつたであろう群衆を省き、その代わりに聖母マリアとエリザベツを、メダイオンの中の胸像として、文字枠の左右に付け加えているのである。《ハーレー福音書》の物語イニシアルはナラティヴな場面を用いながら、全頁大の装飾の中央にしつらえられたマンドルラのような文字枠と、更にそれがロトンドの丸屋根、古代ローマ風のアーチとが相似形を成し、左右にメダイオンの人物像を付加することで、この頁の後に続く『ルカ福音書』の内容を代表するものとしてこの場面を象徴的に表す形をとっているのである。

3. 《ドロゴ典礼書》(パリ、国立図書館、Ms. Lat. 9428)

宮廷派写本がアーヘンで制作されたのと同じ頃、宮殿派ないしは新宮廷派と呼ばれる、より古代的な絵画空間を表すもう一つの写本画群が制作された。この系譜を引くメツツ派の傑作として名高い《ドロゴ典礼書》は、カール大帝の庶子の一人でありメツツ司教をつとめたドロゴの下で、遅くとも彼の没する855年以前に制作された。アダ派写本のような全頁大ミニチュールは持たず、金を多用する全頁大のイニシアルに加え、数多くの物語イニシアルを備える。カロリング朝におけるイニシアル芸術の白眉とも言える同写本では、全199点のイニシアル装飾のうち図像表現を含むものは39点を数え、その殆どでD、O、Cといった開口部を持つ文字の形体の内部に物語場面を表す形式をとっている(figs. 7, 8)。

《ドロゴ典礼書》は1974年にファクシミリが刊行されていることもあり³¹、物語イニシアルを持つカロリング朝期の写本の中では先行研究が多く、イニシアルのイコノグラフィーや、図像と典礼書テキストとの照合

関係については、F. ウンターキルヒャーによるまとまった研究が挙げられる³²。更にメッツ派の傑作として通史にも頻繁に取り上げられており、様式的には概ね以下のように位置づけられている。まず、イニシアルの中に表された人物像は小さいながら、その揺れるような衣紋線に特徴的に現れているように、ランス派写本³³に見られる印象主義を継承した作例であること、そして、文字を枠組みとして用いその開口部に表された物語場面が、アーヘンで制作された宮殿派による写本³⁴の、板絵のような枠取りの中に風景を取り入れたイリュージョニスティックな空間表現を受け継いでいることである³⁵。「キリストの昇天」を表したイニシアル C (fol. 71v, fig. 7) では、二人の天使を伴い天に導かれて自ら岩山を踏みしめて上るタイプの図像によって昇天場面が表されている。アカンサスの葉を持つ鳶の絡まる C の文字は絵画の枠のように機能し、軽い線描と水色の彩色によって表された雲は、大気のある絵画空間を文字の中に生み出している。例えばポルシェはこうしたイニシアルの絵画的表現を重視し、《コルビー詩篇》とは対照的な、「古代的な具象的影響が強く際立てられ³⁶」していると述べている。《ドロゴ典礼書》のイニシアルは、カロリング朝写本画における古代復興という側面が強調されているのである。

しかしながら同写本が持つイニシアル全体を見渡した際に、こうした絵画的空間表現を示すイニシアルはごく限られている。「マギの礼拝」を表したイニシアル (fol. 34v, fig. 8) は D という文字を載しているが、開口部を絵画空間として用いるのではなく、物語場面は文字の柱身と円弧に沿うように展開されている。まず D という文字の柱軸の下端でマギらがヘロデ王のもとから出発し、エルサレムの門をくぐり星に導かれながら円弧を上るようになってベツレヘムの門をくぐり、最後にヘロデ王のちょうど上方で聖母子を礼拝する。開口部は「キリスト昇天」のイニシアルのように背景が描き込まれるのではなく、マギの像を図とした地として羊皮紙の色のまま残され、“DS QUI HODIerna DIE...” の S の文字がその中央を埋めている。「キリスト昇天」のイニシアルが文字を枠として用い絵画的な空間表現による一場面を示していたのに対し、「マギの礼拝」のイニシアルは文字の形体を舞台装置として扱い連続する複数の場面を表しているのである。同写本は物語表現を持つイニシアルの数そのものが多い為、物語場面の描写方法は単一ではなく複数のヴァリエントが生じているが、文字を枠として開口部に絵画的空間表現を示すにせよ、複数の場面を文字の形体に沿わせて連続的に展開させるにせよ、文字に対して比較的小柄な人物像が自由に動き回ることで、典礼書の内容に関連する場面が示されるのが《ドロゴ典礼書》のイニシアルの特徴と言えるだろう。

おわりに

ここまで、制作環境やテキストの異なるカロリング朝期のイニシアル装飾写本《コルビー詩篇》、《ハーレー福音書》、《ドロゴ典礼書》の3点を概観してきた。修道院写字室で制作された《コルビー詩篇》のイニシアルは、物語イニシアルと形象イニシアルによる説話場面の視覚化という表現形式の多様さを示し、人物像の拡大と余白の排除による文字との同化を伴った、ナラティブな場面描写が観察された。物語イニシアルという形式をカール大帝の宮廷派写本で初めて採用した《ハーレー福音書》は、インスラー芸術から継承した組紐文から成る文字の開口部に聖書場面を表す一方で、対面頁の福音書記者像と同様のモニュメンタルな物語イニシアルとして福音書の内容を象徴的に視覚化していた。やや時代の下るメッツ派による《ドロゴ典礼書》では、物語イニシアルの数が格段に増え、時間と空間の用い方を多様化させながらも、文字の形状を利用しその中を人物像が自由に動くことで場面を絵画化していることを確認した。

9世紀前半、古典古代の復興を中心とするカロリング朝芸術の刷新運動の一方、物語場面を装飾文字に

組み込む図像イニシアルという分野が写本画の一分野として定着しつつあったのもこの時代である。そしてこの形式は、8世紀にバルバロイの芸術、すなわちインスラーとメロヴィング朝の写本によって発明されたものであり、カロリング朝期の写本では修道院写本でも、また宮廷芸術やその系譜を引く写本もこの形式を取り入れた。それらは其々の制作環境や昨日に応じた展開を見せたが、その中でも《コルビー詩篇》のイニシアルのように、《ハーレー福音書》や《ドロゴ典礼書》といったカロリング朝芸術の主流とされてきた傾向からは逆の方向を志向する作例が存在していたことが指摘できるだろう。

註

- 1999年から2001年にかけてEU統合を記念してドイツ、イタリア、スペイン、クロアチア、イギリスで開催された一連の展覧会は、「シャルルマーニュ、ヨーロッパの形成」と題され、美術史だけではなく歴史学や考古学等多岐に渡る研究成果を伴う大規模なものであった。ドイツ(バーダーボルン):STIEGEMANN, Christoph/ WEMHOFF, Matthias (Hrsg.), *799 Kunst und Kultur der Karolingerzeit: Karl der Große und Papst Leo III. in Paderborn, Mainz* 1999; イタリア(プレッシャ):BERTELLI, Carlo/ BROGLIO, Gian Pietro (a cura di), *Il futuro dei Longobardi: L'Italia e la costruzione dell'Europa di Carlo Magno*, Miano 2000; スペイン(バルセロナ): *Catalunya en la epoca carolingia: Arte y Cultura artes de romanico siglos IX y X*, Barcelona, Museu Nacional d'Arte de Catalunya 1999; クロアチア(スプリト): *Croats and Carolingians*, Split, The Museum of Croatian Archeological Monuments 2000; イギリス(ヨーク): GARRISON, M./ NELSON, J. L./ TWEDDLE, D. (eds.), *Alcuin and Charlemagne. The Golden Age of York*, York, the Yorkshire Museum 2001. 写本画に関しては、2007年にパリのフランス国立図書館で開催された大規模な展覧会「カロリング朝名宝展」が挙げられる。展覧会カタログに加えて、関連するシンポジウムが後に論文集として出版されている。LAFFITTE, Marie-Pierre/ DENOËL, Charlotte/ BESSEYRE, Marianne/ CAILLET, Jean-Pierre (éds.), *Trésors carolingiens: livres manuscrits de Charlemagne a Charles le Chauve*, Paris 2007; CAILLET, Jean-Pierre/ LAFFITTE, Marie-Pierre (éds.), *Les manuscrits carolingiens*, actes du colloque de Paris, Bibliothèque nationale de France, le 4 mai 2007, Turnhout 2009.
- カロリング朝遺跡では例えばロルシュ修道院跡が1991年に世界文化遺産登録され、2011-12年には20周年を記念した「ロルシュ修道院——カール大帝の王立修道院から世界文化遺産に至るまで——」と題する展覧会が開催された。更にカロリング朝期の西構えが暫定リストとして世界遺産登録に申請されているコルヴァイ修道院跡では、蔵書の復元と調査も含めた「一千年の英知」展が巡回展として開催された。
- 8世紀以前の写本に見られるテキストに関連しないイニシアル装飾に関しては以下を参照。NORDENFALK, Carl, *Die spätantiken Zierbuchstaben*, 2 Bde., Stockholm 1970.
- 《コルビー詩篇》に現存するイニシアル156点のうち、主題の特定可能な説話場面を表したものは11点、主題は曖昧だが人物像を含み何らかの図像表現を示すものは51点、動物イニシアルは56点、植物・幾何学文イニシアルは37点である。
- 詩篇本文と図像の照合はJ. ポルシェから近年のR. カースニッツに至るまで、本作品の研究の中心を成している。PORCHER, Jean, *Aux origines de la lettre ornée médiévale*, in: *Mélanges Eugène Tisserant*, Rome 1964, pp. 273-280; KAHSNITZ, Rainer, *Frühe Initialpsalter*, in: *The Illuminated Psalter: studies in the content, purpose and placement of its images* (BÜTTNER, Frank O. ed.), Turnhout 2004, S. 137-155.
- PÄCHT, Otto, *The pre-Carolingian roots of early Romanesque art*, in: *Romanesque and Gothic art, Studies in Western art*, v. 1, Acts of the Twentieth International Congress of the History of Art, Princeton 1963, pp. 67-75. 尚、この論文は永澤峻氏が以下で詳細に紹介している。永澤峻「西洋中世初期の動物図像をめぐって」、『象徴図像研究』第3号、和光大学象徴図像研究会、1989年、52-64頁。
- PÄCHT, *op. cit.* p. 70: "The art of the Corbie Psalter is an anachronism in a double sense. Steeped as it is in the Barbarian tradition of both Insular and Continental art, it is archaic when judged by the standards of the official art of Charlemagne's reign, with which it is contemporary; on the other hand, it is far ahead of its time and contains the blueprint of things to come in the distant future".
- Ibid.*, pp. 73-74: "If the points of contact between pre-Carolingian and Romanesque art enumerated so far are conceded, it may still be argued that the influence of the Barbarian tradition was limited to the sector of ornament, a sector which in Romanesque times bears also the imprint of Oriental decorative art, again an anti-classical ingredient."
- 《コルビー詩篇》と《ゴデスカルクの福音書抄本》の比較に関しては以下の論文を参照。PORCHER, Jean, *L'Evangélaire de Charlemagne et le psautier d'Amiens*, in: *Revue des Arts*, 7, 1957, pp. 51-58. 尚、これら二写本とアダ派写本との様式的対比についてポルシェは通史でも取り上げている。PORCHER, Jean, *Les Manuscrits à peinture*, in: *L'Europe des invasions* (éd. par

- HUBERT, Jean/ PORCHER, Jean/ VOLBACH, Wilhelm Friedrich), *L'univers des formes* v. 12, Paris 1967, p. 195; PORCHER, Jean, *Les Manuscrits à peinture*, in: *L'Empire carolingien* (éd. par HUBERT, Jean/ PORCHER, Jean/ VOLBACH, Wilhelm Friedrich), *L'univers des formes*, v. 13, Paris 1968, p. 74ff.
- 10 *Ibid.*, p. 206: "... à l'opposé du genre narratif antique, de l'illusion naturaliste: tournés vers l'Antiquité, les Carolingiens, eux, ignoreront; l'art roman s'en souviendra."
- 11 KUDER, Ulrich, *Die Initialen aus Amienspsalter (Amiens, Bibliothèque municipale MS 18)*, Ph.D. diss., Ludwig-Maximilians-Universität, München 1977.
- 12 *Ibid.*, S. 310: "Die Initialen des Amienspsalters vereinigen Heterogenes, darin, unter anderem, sind sie typisch karolingisch."
- 13 KUDER, *loc. cit.*, p. 320: "Figurierte Initialen sind, wie Zierbuchstaben überhaupt, also solche unantik. Charakterisiert man die karolingische Antike, als Renovatio, dann kann der Amienspsalter nicht eigentlich der karolingischen Kunst angehören. Umgekehrt sind die figurierten Initialen Zeugen dafür, daß ein Ansatz, der die karolingische Kunst allein und ausschließlich als eine der antikisierenden Richtungen des Mittelalters begreifen will, ihr Spezifisches verfehlt."
- 14 クーダーは、ボルシェヤベヒト、W. ケーラー (KOEHLER, Wilhelm, *Buchmalerei des frühen Mittelalters: Fragmente und Entwürfe aus des Nachlass*, München 1972.) において「カロリング朝的」という言葉が時代概念と様式概念との間で二義的に用いられてきたことについて指摘している。KUDER, *op. cit.*, S. 58-59.
- 15 「物語イニシアル」(英: historiated initial, 独: historisierte Initiale, 仏: initiale historiée) という用語は、そこに表された図像が後続のテキストに関連するイニシアルを指す用語として、また開口部に図像表現を示すイニシアルを指す用語として、研究者らの間で二義的に用いられてきた。本稿で邦語論文における用法の認知度を考慮し、後者の意味で用いることとする。尚、「物語イニシアル」の語義の問題においては以下に詳細が論じられている。JAKOBI-MIRWALD, Christine, *Text - Buchstabe - Bild: Studien zur historisierten Initiale im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin 1998, S. 11ff.
- 16 イングランドの最初期のイニシアルは2点確認されている。《ヴェスパシアン詩篇》と称される『詩篇』写本(ロンドン、大英図書館、Ms. Cotton Vespasian A I)と『教会史』写本(サンクト・ペテルブルグ、ロシア国立図書館、Ms. Q.v. I. 18)である。両写本については以下で論じられている。SCHAPIRO, Meyer, *The Decoration of the Leningrad Manuscripts of Bede*, in: *Scriptorium* 12, 1958, pp. 191-207; JAKOBI-MIRWALD, *op. cit.*, S. 33ff.
- 17 《ヴェスパシアン詩篇》では、詩篇第26篇の「ダヴィデとヨナタン」(fol. 31r)及び詩篇第52篇の「ライオンと闘うダヴィデ」(fol. 53r)の2点の物語イニシアルが含まれる。本写本については以下を参照。WRIGHT, David Herndon (ed.), *The Vespasian Psalter: British Museum, Cotton Vespasian A.I., English Manuscripts in Facsimile*, v. 14, Copenhagen 1967.
- 18 詩篇第7篇(ウルガタ版)に「ライオンと闘うダヴィデ」(『サムエル記上』第17章32-37節)について直接的に言及する箇所はない。ここでは、「彼獅子の如く」(詩篇第7篇3節)という言葉から想起される場面を表していると考えられる。
- 19 同じコルビーの地で制作された8世紀後半の『ヘクサエメロン』写本(パリ、国立図書館、Ms. Lat. 12135)では、より簡素で単純な鳥魚文イニシアルによる装飾が見られる。
- 20 《ジェローヌの典礼書》では“Te igitur”のイニシアル T に磔刑図を組み合わせるだけでなく、福音書記写像を表した形象イニシアル等が多数見られる。《コルビー詩篇》と《ジェローヌの典礼書》の比較については以下を参照。PORCHER, *Aux origines de la lettre ornée médiévale*, *op. cit.*
- 21 外典である詩篇第151篇は“HIC PSALMUS PROPRIE SCRIPTUS DAVID ET EXTRA NUMERUM CUM PUGNAVIT CUM GOLIAD” (“番外とされているこの詩篇はダヴィデ自身による執筆とされている、彼がゴリアデと戦った後のものである”)という標題がつけられており、標題から連想される場面を絵画化している。
- 22 《コルビー詩篇》のイニシアルとシトー派による『ヨブ記注解』写本(ディジョン、市立図書館、Ms. 173)のイニシアルとの形象イニシアルという原理的類似についてはベヒトが既に指摘している。PÄCHT, *op. cit.*, p. 71.
- 23 《セント・オルバンス詩篇》のマリア賛歌“Magnificat anima mea...”のイニシアル M (pag. 394)と更に近い形体的類似を示す《コルビー詩篇》のイニシアルは、詩篇第50篇の「ダヴィデとナタン」のイニシアル M (fol. 45r)であろう。M という文字の持つアーチの下に表した向かい合う人物像で説話場面を表し開口部を充填する手法は、浮彫彫刻における所謂「オム・アルカード」に通じる原理である。
- 24 《アブヴィル福音書》(アブヴィル、市立図書館、Ms. 4)、《ハーレー福音書》(ロンドン、大英図書館、Ms. Harley 2788)、《ソワツソンのサン・メダールの福音書》(パリ、国立図書館、Ms. Lat. 8850)の3点である。
- 25 縁が裁断され現在は248×371cmの大ききで製本されている。同写本の詳細に関しては以下を参照。KOEHLER, Wilhelm, *Die Karolingischen Miniaturen, 2. Die Hofschule Karls des Grossen*, Berlin 1958.
- 26 尚イニシアル研究の第一人者とも言える A. シャルトは、アダ派写本を物語イニシアルの最初の例として挙げている。SCHARDT, Alois, *Das Initial*, Berlin 1938, S. 38ff.
- 27 PORCHER, *Les Manuscrits à peinture*, in: *L'Europe des invasions*, *op. cit.*, p. 78ff.
- 28 イニシアル装飾の形体論或いは図像内容を中心とした研究には以下が挙げられる。SCHARDT, A., *op. cit.*; GUTBROD, Jürgen,

- Die Initiale in Handschriften des 8. bis 13. Jahrhunderts*, Stuttgart 1965; MAZAL, Otto, *Das Buch der Initialen*, Wien 1985.
- 29 福音書記者像と物語イニシアルのミニチュールが対向頁に配されたものであるという看過されがちな事実は、アレクサンダーが指摘している。ALEXANDER, Jonathan James Graham, *The Decorated Letter*, London 1978, p. 48.
- 30 ロンドン、大英図書館、Ms. Cotton Claudius B.V., fol. 123v。アダ派の作例の一つと見られているが、「ザカリアへのお告げ」の挿絵部分はこの福音書写本断片に貼り付けられたものであり、制作年代や制作地に関しては議論の余地がある。この福音書写本断片については以下を参照。KOEHLER, Wilhelm, An Illustrated Evangelistary of the Ada School and Its Model, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 15, London 1952, p. 49ff; van der HORST, Koert: The Utrecht Psalter: Picturing the Psalms of David, in: *The Utrecht Psalter in Medieval Art. Picturing the Psalms of David* (ed. by van der HORST, Koert, /NOEL, William/WÜSTEFELD, Wilhelmina C. M.), Utrecht 1996, p. 80.
- 31 *Drogo-Sakramentar. Vollständige Ausgabe von Paris, Bibliothèque Nationale lat. 9428*, Kommentar von KOEHLER, Wilhelm/MÜTHERICH, Florentine, Codices selecti. 69, Graz 1974.
- 32 UNTERKIRCHER, Franz, *Zur Ikonographie und Liturgie des Drogo-Sakramentars (Paris, Bibliothèque nationale, Ms. Lat. 9428)*, Interpretationes ad Codices 1, Graz 1977.
- 33 ランス派写本の代表例として例えば《エボの福音書》(エベルネー、市立図書館、Ms. 1)、《ユトレヒト詩篇》(ユトレヒト、大学図書館、MS Bibl. Rhenotraiectinae I Nr 32) が挙げられる。
- 34 宮殿派と呼ばれる写本群として例えば《ウィーンの戴冠式の福音書》(ウィーン、美術史美術館宝物庫) や、《アーヘンの宝物庫の福音書》(アーヘン、司教座聖堂宝物庫) が挙げられる。
- 35 例えばドッドウェルが通史においてこうした位置づけをしている。DODWELL, Charles Reginald, *The Pictorial Arts of the West, 800-1200*, Yale University Press Pelican History of Art, New Haven 1993, p. 60.
- 36 PORCHER, Les Manuscrits à peinture, in: *L'Europe des invasions*, p.161: “il s'agit là d'un volume fortement marqué d'influence figurative antique...”

[図版出典]

figs. 1, 2: 所蔵先(アミアン市立図書館)より購入 / fig. 3: *The Vespasian Psalter: British Museum, Cotton Vespasian A.I.* (ed. by WRIGHT, David Herndon), English Manuscripts in Facsimile, vol. 14, Copenhagen 1967./ figs. 4, 5: 所蔵先(大英図書館)より購入 / fig. 6: *The Utrecht Psalter in Medieval Art. Picturing the Psalms of David* (ed. by van der HORST, Koert, /NOEL, William/WÜSTEFELD, Wilhelmina C. M.), Utrecht 1996./ figs. 7, 8: *Drogo-Sakramentar. Vollständige Ausgabe von Paris, Bibliothèque Nationale lat. 9428*, Kommentar von KOEHLER, Wilhelm/MÜTHERICH, Florentine, Codices selecti. 69, Graz 1974.